opusdei.org

## 属人区長の書簡 (2014年7月)

ドン・アルバロの列福式が近づいていることで準備の刺激となっている今、属人区長は、周囲の人々と共に慈善事業に励むよう勧める。

2014/07/06

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

先日、盛大に祝ったばかりの聖体の 祭日とイエスの聖心の祭日、そして マリアの汚れなき御心の祝日は、私 たちに永遠の至福に至る小道を示立 ます。つまりイエスの傷ついた聖 に入り込み、聖母のみ手にすがった。 と聖パウロの祭日には、教皇様を と聖パウロの祭日には、教皇を のご意と同時に、人々にキリた。 にすると、私たちは今一度、創立者 あの勧めを実行したのでした。 Omnes cum Petro ad lesum per Mariam!

6月26日は、多くの場所で、聖ホセマリアを称えるミサ聖祭を捧げて神に栄光を帰すことが伝統になっています。その場所で、そして世界中で、その取次ぎによって霊的実りがふんだんにもたらされるようにと願っています。その前日、6月25日には、ドン・アルバロの司祭叙階60周年を迎えました。数日後の7月7日は、1935年のオプス・ディへの所属

願いの記念日です。このような記念 日には、心から愛する前任者の模範 を考察するよう促されます。いつも 人々のことを注意深く見守り、霊的 物的に必要としていることに配慮し ておられました。

主の呼びかけに応えた50周年の時、 とても単純にこうしたためられまし た。「私の召命の歴史は、創立者の 信頼に満ちた忍耐強い祈りの歴史で す。パドレは4年間ほど、私に会っ たこともなく、ただ私の叔母から私 のことを聞いたというだけで、主が この大きな恵み一信仰の恵みの後に 私に下さることのできた大きな恵み 一 を私にお与えくださるよう祈られ ました。創立者のこの力強い祈りと 共に、パドレの息子たちの使徒職が ありました。彼らは私をフェラスの 学生寮に連れて行き創立者に紹介し てくれる前に要理指導と慰問に誘っ てくれました。全て主がしてくだ さったことです。 | <sup>[i]</sup>

ドン・アルバロは、全面的にキリストに従い、そのみ国の発展に尽体のの二つの条件で表しておられまで提示しておられまでで表が恵かな言葉で提示していまるとは、きずる主要な「武器」なので人れもでする主要ない。今になることで、今になることで、今になっています。

ドン・アルバロは「全て主がしてした。 ださった」と説明されました。 し主は、一人ひとりが一具体の に、個人的な犠牲と共に、 の霊的物心に大めに、 を霊的物心に活動することを少る、 をいるが伝えていば、 とで、の番判に関するようにでから、 聖智の師れていば、 をといるでからの世でもいるでからで、 最人たちが、 に、 を思いやったという理由で、 は、 に、 に、 を思いやったという で、 のは、 の世でいり で、 の世でいり の世でいり の世でいり のたといり に、 の世でいり の世でいり のたといり に、 の世でいり の世でいり に、 のたといり に、 の世でいり のたといり に、 の世でいり のたといり 主がご自分の喜びに入るよう招かれる場面での言葉です。「お前たちは私が飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ(…)。はっきり言っておく。私の兄弟であるこのもっとも小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことだ。」

イエス・キリストは、貧しい人や病 人、孤独な人たちなど困っている人 たちをすぐ近くから見守られまし た。彼らに特別な愛を注いで近くに 召され、弟子たちに同じことをする ようお望みになったのです。現代社 会の多様な状況や困窮に目を向ける と、皆と、そして一人ひとりと連帯 しておられた同じイエス・キリスト を日々見つけ出します。隣人や遠方 の人々を慈しみの心で見つめること で、人となられた主に非常に近くか ら触れることができます。教皇フラ ンシスコが分からせてくださったこ とです。「今は、どのようにしてイ

エスの御傷に触れることができるでしょうか。トマスのように見ることはできません。慈しみの業を実行することでイエスの傷を体験します。これが今イエスの傷に触れることなのです。」[iii]

あの1935年7月7日のドン・アルバロ の召し出しは、内的な恩恵の働きと 全ての人、特に困っている人達に対 する兄弟愛によって、準備されてい たことがわかっています。既にオプ ス・デイを知っていた友人たちと、 1934年から度々マドリードのある地 区を訪れ、要理を教えたり、貧しい 人や病気の人たちを訪問したりして いました。聖ホセマリアとの最初の 接触は、間違いなく、犠牲に伴われ たこれらの活動の直接的な実りで あったと思います。ご存知のよう に、ある日、友人と一緒にある小教 区の子供たちに要理を教えた後、反 キリスト教のグループに襲撃され、 モンキースパナで頭を殴られ、深い

すぐにオプス・デイ所属を願い出る 決意をしたことが理解できます。そ のときから、聖ホセマリアが、寮を 度々訪れる学生たちに、貧しい人や 病人たちを訪問するよう頼んでおら れるのを知って、ドン・アルバロは 慈善事業の重要性―理論だけでな く、実際面で一を再確認しました。 後年、こうコメントされました。 「貧しく見捨てられた状態の人達と の接触は、精神的に大きな衝撃で す。それは私たちの心配ごとが、愚 かな自己の利己主義や卑小さ以外の 何物でもないことを分からせてくれ ます。|

オプス・デイにおいては、この仕える精神を常に生きてきました。聖ホセマリアがこう言っています。「オプス・デイは、マドリードの病院で、もっとも貧しい地区で、困窮している人々の中で生まれました。私たちは、貧しい人たち、子供たちた病人たちの世話を続けています。こ

れは決して廃れることのないオプス・デイの伝統です。いつも、貧しい人たち一精神的な貧しさにも、助けが必要一、子供たちや病人がいるからです。もっとも困っている小教区を手伝う要理指導、聖母の貧しい人々の訪問を実行します。」 [v]

創立者が、常に、様々な国の困窮者 を援助する多くの事業を推進された ことをあなた方はよく知っていま す。ドン・アルバロも同じ道を辿 り、年配の人たち、あるいは若者た ちとの集いを持つときには、あまり 恵まれてない人たちに配慮するよう 勧めておられました。教育や衛生、 労働などの分野で必要な手段を講じ ることを手伝い、具体的に人々を神 に近づけ、彼ら自身が神に近づくよ う助けることです。経営者や企業 人、銀行員、一般に経済的な事柄に 関わっている人たちにも、この責任 を自覚し深めるよう促し、彼らに、 これらの仕事に着手したり、それを

強化したりする可能性について話されました。これは、キリスト者の業を特徴付ける正義と愛徳、兄弟姉妹である全人類に対する誠実な愛から派生する義務であると考えなければならないことです。

ドン・アルバロが、司牧旅行で次の ような勧めをしたことは不思議では ありません。訪問先の物的な状況、 あるいは労働条件の向上に思いをい たし、そのような状況を向上させる ための新たな手段を講じるように と、オプス・デイの信徒や協力者 に、熱心に勧めました。中でも1987 年には、フィリピン滞在中、多くの 人たちが必要なものに事欠く様子に ついて考えさせられた時に、次のよ うなことを思いつき、話に耳を傾け ていた人たちに勧めました。こうし て設立されたセブとマニラでの職業 訓練校と社会福祉センターが、今で はすばらしい発展を遂げています。 他の機会にも、ドン・アルバロの司

祭としての心を知っていた聖職者た ちからの願いを受け入れられたこと があります。1989年の司牧旅行の 際、コンゴであったことです。大統 領と司教協議会からの要請を受け て、既に発展していた診療所を、責 任感とプロ意識をもって、病院施設 に移行する可能性を探り推進するよ うオプス・デイの信徒と協力者に勧 めました。それは、現地の人たちだ けでなく、コンゴで働く外国人司 祭、修道者や修道女などを導くため でもありました。この仕事は、大き な成果をあげ発展しています。そし て、病院内では専門医が働き、多く の人たちが外来で診療を受けていま す。

教会の社会教説の実践を広める使徒職を熱心に繰り広げ、聖ホセマリアがしていたように、キリスト教的観点に立った経営者や管理職にあたる人を育成するため、学校を創るよう頼んでおられました。しかも、それ

が発展した諸国だけに限られること なく、途上国でも同じことをするようにと繰り返しておられました。社 会に極端な格差のあることから生じ る諸問題の解決のため、重要なこと だと確信しておられたのです。

ドン・アルバロは、その司牧書簡の 一つで、善きサマリア人のたとえを コメントし、社会の只中で聖性の道 を歩むキリスト者を特徴付ける、正 義と愛徳を結び付ける方法について 新たな色合いを見つけ出し、こうし たためておられます。「善きサマリ ア人のように、それぞれ自分の他の 諸義務を疎かにすることなく、困っ ている隣人をでき得る限り世話し助 ける熱意は、司祭的な心と社会人の 考え方が融合している証拠だと言え ます。 I <sup>[vi]</sup>神は、何よりも、専門職 と日常生活における自分に固有な諸 義務を果たすようお望みです。この なすべきことの中で一ドン・アルバ 口は続けます一、主のお許しにより

「他人の乏しさや苦しみを目にするでしょう。それは司祭的な心をもって諸活動に携わっている証拠です。他人のことを無視したり無関心になっていないからです。聖化すべたの諸義務を投げ出すことなく、人々を手伝うならそれも司祭的ながを持っている明らかな証拠です。」

確かに、私たちには、遠くはなれた 町や人々に思いを馳せ、近くの人た ちへの気遣いを忘れてしまう危険が あります。近くの人が、自分の心配 事に一忍耐と愛情を持って一耳を傾 け、ふさわしい助言をしてくれるこ とを、つまり私たちの時間を自分の ために使ってくれることを期待して いるのに気づかないのです。そんな ときは、傷ついた人の世話を引き受 け、家に迎え入れた宿屋の主人のよ うに振る舞うときです。その行いを 黙想したドン・アルバロのコメント です。「あなた方も皆、自分の職場 貧しい人や疎外されている人たちの 人たを絶えず気づかっておられる要 皇様は、近くや遠くの助けを必ず気でないる全での人たちにつます。 とてのようにでは、近くのようにではないででは、 であり、これは自分がないでといがあることであり、「霊的なのでというないであり、「これはでは、 に心を向けることであり、「ことになるがない」になるできたいうことでもいません。 決してそんな意味では

ないのです。苦しむ人間イエスに向 かわなければならないということで す。しかし、また人間イエスは、勉 強や知性や文化を通して、主を知ら ずにいる人たちの中で、苦しんでお られます。そこに出向かなければな りません。それゆえ、私は「周辺に 行く」という表現が好きです。存在 の周辺に行くのです。皆が、彼ら全 員が、物理的現実的な乏しさから、 これまた現実的な知性の乏しさに 陥っています。乏しい皆が、道を行 き来しています。そこに行くことで す、そしてそこで、言葉と行動で福 音の種を蒔くのです。| <sup>[ix]</sup>

聖ホセマリアの精神に忠実な人たちが、若者や成人たちとの使徒職を展開している所で慈善事業の実行が増えているというニュースを聞いて過れています。家や病院で過ごしている病気の方々により愛情を込めて接するよう努めること、食糧支援(フードバンク)に協力するこ

と、スラム街や貧民街に住んでいる 人々、自分の惨めさを隠している人 に無関心でないこと、施設の高齢者 や、牢獄の中で気遣ってくれる人が 誰もいない人々を訪問し、時間を過 ごすこと。これら全てのことは、ド ン・アルバロの列福式を準備するた めのすばらしい方法です。最近、こ の出来事のための超自然的な準備に 磨きをかけるようにお願いしました が、慈善事業もこの準備の一つで す。また、何よりも「ゆるしの秘跡 の使徒職」を熱心に実行してくださ い。罪によって主から遠ざかってい る人を神に近づかせること以上にす ばらしい愛徳の実行はないのです。

愛するドン・アルバロの列福式は一 主と聖母にお願いします―、多くの 人たちを一まず私たち自身を一キリ ストと教会をいっそう深く愛するよ うに仕向けます。それは、特別の兄 弟愛に生きるときであり、今まで、 オプス・デイの精神と使徒職に何ら かの形で参加し、歩みを共にした全 ての人たちに友情と愛情を伝えるま たとない機会です。ドン・アルバロ が、これらの一人ひとりのために、 特別なやり方で取り次いで下さるこ とを確信しています。

いつものように、私の意向のための お祈りをお願いします。今月後半に 予定している中米諸国への旅の実り のためにもお祈りください。

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

パンプローナ、2014年7月1日

[i]ドン・アルバロ、1985年7月1日手 紙(「家族の手紙」I, 173番)。 [ii]マタイ 25,35.40。

[iii]教皇フランシスコ、2013年7月3 日説教。

[iv]ドン・アルバロ、1988年3月4日 家族の集まりのメモ。

[v]聖ホセマリア、1931年12月8日 「指導指針」57番。

[vi]ドン・アルバロ、1993年1月9日 手紙20番(「家族の手紙」III, n. 387)。

[vii]同上

[viii]同上21番(「家族の手紙」III, n. 388)。

[ix]教皇フランシスコ、2013年6月17 日ローマ教区での講演。 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2014nian-7yue/ (2025/12/16)